てあるか、一向に考ふることが出來なく成つて了ふ。然るに眞如の本體は、空なるにも拘らず、その相からいふときには不空である。不空とは如何なることかといふに、その空の中に、無量の功德を具へて居る。既に諸〳〵の功德が具つて居つて見れば、全くの空でない。之を不空眞如と名けるのである。勿論今、諸〳〵の功德といへば性善である。既に道理の本が善であるなれば、此の宇宙間に、惡の行はれ樣道理がない。既に種々の惡法が行はれるばかりでない。三惡道、四惡趣等の惡結果まで、現はれて居るものとすれば、その惡の原動力は、何から來るかといふとき、假令『業道は秤の如し』といふたとて、その惡の性が道理の中になければ、顯はすことは出來ぬ道理

である。故に天台には、性惡といふことも許すのである。されば空眞如の中には、善惡不二であつて、而も善惡二性を具へて居るものといはねばなるまい。然るに起信論には、『眞如の相大たる不空眞如の中には、無量の功德を具へて居る』といふのは、衆生心の佛性に就て、體相用の三大を、分別したのであるから、體といふときには、善惡無差別であるが、相といふときには、佛に成るべき道理の相であるのだから、性惡の分をば除いて、性善の分だけを擧げて、無量の功德を、具足すといはれたものであらう。されば空眞如は、廣くして善惡の差別を見ず、唯絶待の有樣に名け、不空眞如は、同じ理體の中に在つても、狹く善の部分のみを擧げて、佛性の相大とせら

れたものである。

用大と因果

(二) それであるから起信論では、その用大の有様も、善因善果の部分のみを擧げて、その善果を佛身と爲し、その善因を菩薩の修行とせられてある。勿論その中に流轉と還滅との二道に分つて、還滅門は善因善果であるが、流轉門は惡因惡果の方に成つて居る。そこで、その惡因惡果の方面を塞いて、善因善果の方を開いて勸めてある。之に依つて考ふるも、此の宇宙間には、今現に善惡の兩方面ともに行はれて居るといふことは事實である。されば若し宇宙の全體から、此の道理の上に體相用の三大を分別するときは、その體大たる空眞如には、唯絶對といふのみにして、何の差別はなけれども、相

因行の程度

大なる不空眞如の中には、啻に無量の功德性のみではない。諸の罪惡性も具へて居るに相違ない。その善惡二性を具へて居る相大が、若し活動を始めたら最早、相大とはいへぬ。之を用大と名けるのである。そこで用大と成れば、必ず形式を顯す。それは如何にその形式を顯すかといへば、善因善果、惡因惡果と顯れて行くのである。

(三) 此に於て惡因惡果の部分は、到底吾々の信仰の對象と成るべきものでない。それは何故といふに、信仰の信とは、善惡の簡び別を爲して、善に着いて離れぬのが信である。此の信を以て仰ぐのであるから、最も善の高尚なるものでなければ、信仰するだけの價値がない。そこで同じ善因善果といふても、惡の因果の混じてゐる間は、

決して純善でない。その純善でないものゝ中に、段々の區別が在つて、總じて菩薩以下は、未だ純善といへない。けれどもその中に、凡位と聖位との區別があつて、その聖位の部に入れば、念の上にも、行の上にも、全く不退轉の位であるから、纖毫も退轉の憂なく、進める位であるから、最早佛に近いのである。然るに凡位に居る間は、之を十信三賢と名けて、十信の位に居る間は、尙だ歷緣對境に依つては、退轉のある位で、之を十信退位と名けてある。然るに十信を仕上げて、十住、十行、十廻向、この三十段を三賢と名けて、最早退轉のない仲間に成つて居る。けれども十聖といふ初地以上の菩薩に比すると、段々の程度が在つて、十住は前の十信に較ぶれば信不

退である。けれども、後の十行十廻向等に較ぶれば、行位と念とは、尙だ退轉の憂があるのである。それは何故といふに、尙だ肉體が在つて、分段生死といふて、此の肉體を散じたり、集めたりして居る間であるから、全く退轉なしに進むといふことは出來ぬ。それが初地以上の聖位に進むと、最早、分段生死の憂が無く成るから、只精神上、靈の生活である。けれども七地以前は、尙だ行不退の分際にて、八地以上が全く念不退である。是れ肉體の足手がらみがないから、全く退轉なしに善の方面に向つて、進むことが出來る。けれども尙だ、その根柢の上に、無明の曇りが遺つて居る。是れが爲に尙、鈍善無漏の結果とはいへぬのである。然らばその、鈍善無漏の

結果とは何であると云ふに、それが即ち佛果といふものである。

(四) 然るにその佛果の種子は、何から成り立つたかといふと、之を佛性と名げるのである。その佛性は、一切衆生の心の上に、平等に具へて居るものである。之を法界に共有して法性といひ、之を個人に收めて佛性といふ。此の尊き佛性は、吾々の心の上に、確に具有して居るにも拘らず、今の有様は、惡因惡果の雜集物にて包圍してあるから、その光りを顯すことが出來ぬ。故に之を段々と振り灌いで行くのを、即ち佛道修行と名けて、又は菩薩行ともいふのである。故に吾々が佛に成るといふことは、道理の應用を誤らぬやうにするといふことである。今暫くその道理に就て體相用をいふときには、

その平等一味、善惡不二の有様は、道理の體である。而してその中に、善惡二性を具へて居るのは、その相である。故に此の宇宙間の者が、活動すれば必ず、その二性が變化を起すのである。その變化とは、善因善果、惡因惡果、或は善惡雜集因、雜集果、種々雜多の因果を顯すのである。之を道理の用と名けるのである。されど今は、佛果を求めるを以て、目的とする手前であるから、惡性と惡因惡果の分を省いて、唯善性と善因善果の部分のみを採て、體相用の三大を分別したまでゞある。

(五) 然るに若しも、その佛といふ具體的のものに就て、此の體相用の三大を分別すると、渾てその空眞如も不空眞如も、みな引括つて

之を法身佛と名けて、佛の體大とするのである。次に此道理を善用して、善因善果の極に達したる所の有樣を、之を報身佛と名けて、佛の相大と爲すのである。然るに此の報身佛が、自分ばかり佛に成つて好いといふて、澄ましして居られぬから、豫て持前の慈悲心を起して、衆生濟度を爲さるゝとき、所謂、觀音の三十三身といふ樣に、種々の姿を現じ、善巧方便を示さるゝ、之を化身佛と名けて、佛の用大とするのである。されば理體に就て言ふ三大と、佛體に就て言ふ三大では、同じ名目であつて、餘程その趣が違つて來る、加之、この三大といふことは、何の上にも應用の出來べきことであるが、有形と無形との關係を明にするには、此の法則に隨ふて分別する

のが、一等解りが可いのである。

(六) そこで吾々が信仰の對象を求むるときに、宇宙の本體は道理に相違ないが、只その理體とか、理相とか、理用とかいふものでは、何分にも漠々として纏りが惡い。そこでその理用に依つて、發現したる具體的の者であると、非常に都合が好く成るのである。勿論信仰の對象であるから、善因善果のもので無ければ相應しない。若し相應しないものを、所對として信ずるときに、邪見とも成り、邪法とも成るのである。そこで善因善果の極に達したものでないと、全く信仰の對象とするだけの價値がない。而してその善因善果の極に達したものとは、即ち佛陀である。その佛陀に又體相用の三大があ

三大は萬法に渉る

る。その體相用の三大、素より離れたるものではない。けれども、吾々が信仰の對象とするときには、何の方面が最も都合が可からうかといふことは、次の問題として、今は只理體と佛體との二を明にして、何れが可からうかといふときに、信仰の對象としては、佛體を本尊として崇むるを以て、最も修養の上に、力あるものと斷ずるのである。

七、法報化の三身

(一) 體相用の三大は、何の上にも具有し居る事とて、若し理體本位のときは、空眞如が體大で、不空眞如が相大に成つて、善因善果が

佛の相大の中に自受用と他受用との區別あり

用大と成る。然るに今、佛體本位のときは、眞如に空、不空等の區別を立てぬ。總て此の理體を體大と爲し、之を法身佛と名け、次に善因善果の極に達したるもの、之を報身佛と名け、而も之を佛の相大とするのである。然るにその報身佛が、慈悲心を起して、衆生を濟度しやうといふとき、それ相當の姿を現ず、之を化身佛といふ。是れは佛の用大である。されば體相用の三大は、何の上にも應用が出來る。寧ろ應用といふよりは、一切の事物に、具有して居るのであるから、如何なる微細な物を捕まへて見ても、みな體相用の三大を具へて居る。實に不思議なものといふの外はない。

(二) さて今は、佛體に就ての體相用、即ち法報化の三身である。そ

の三身の本體は、何であるといふたら、言ふまでもない、眞如法性の理體である。此の理體が活動して因果となる。その因果には、善因善果もなれば、惡因惡果もある。けれども今は、佛を顯す方であるから、惡因惡果の分は、總て取り除きである。故に唯、善因善果の方のみを用ひて、未だその極に達せずして、修行中にあるもの、之を菩薩といひ、既にその極に達したるもの、之を佛果といふ。此の佛果を得たる姿を、報身佛と名ける次第である。之を佛の相大といふ。此の報身佛に、自然に自受用身と、他受用身の區別がある。之れ恰も吾々人間に、內心と容貌との二方面あると同樣である。即ち佛の內證智、之を自受用身の如來と名く。勿論、智といふものは、

眞實智慧と煩惱との關係

理に依つて成り立つものである。お互の此の心が、道理を所對としたるときに、智といふものに成る。然るにお互の心も、その本は道理である。けれども個人の身體に宿りて、宇宙の道理を所對とするときには、這裏に能所の區別が立つて來る。されば所對は宇宙の道理なれども、能體の心は、之を智と名くるのである。

(三) 然るにその能對の心が、悉く智と名けらるゝかといふときに、そこに段々の程度が在つて、容易に智といふものに成ることが出來ぬ。それは畢竟、何故かといふに、既に吾々の如く、種々の因緣に依つて、此の肉身を集めて見ると、是れが所謂、私利私欲の凝結物である。此の凝結物が、その生命を保存する爲めに、生存欲といふ

ものが、非常に強く起つて來る。併しそれが、如何に強く起つて居らうとも、その道理を所對にする精神が、鞏固であれは、私利私欲の一方に傾く憂はない。けれども吾々の精神といふものは、存外に薄弱に成立て居る。それが何で薄弱に成立たかといふと、その精神の中へ、私利私欲が、浸入したからである。之を極その奥底に就て無明といひ、稍〻擴張して塵沙といひ、それが次第に粗荒く成つて、之を煩惱といふ。斯ういふ異分子が、吾々の精神内に、浸入して居ることゝして、外の五官の方に觸れて、肉欲の起る都度に、内の無明煩惱が、喜んで之に應ずる。此の時に内外相應して、私利私欲の方が、非常に勢力を得ることに成る。その私利私欲の勢力は、即ち肉

直實智慧の圓滿を期す

欲の勢力で在つて、精神の方は、それだけ薄弱に成つて居る勘定である。されば精神の薄弱とは、素より道理を所對と爲すべき精神なるに、その中へ私利私欲が、浸入してゐるからである。それゆゑ到底正當な活動は、出來ぬことに成つて居る。

(四) 然るに佛といふものに成るには、先づ最初に『煩惱無邊誓願斷』と誓つて、自己の精神内に、浸入せられたる私利私欲の習慣を、撲滅するとに勤めるのであるが、之を菩薩行と名ける。そこで次第にその程度を進めて參ると、假令、肉體の私欲は歇まずして、五官に觸れて種々の私欲は起るにもせよ、精神の勢力が、鞏固に成つて居れば、その都度々々に、打消し〳〵、經過して行くことが出來る。

四智卽自受用報身

若しそれが次第に增進して、此肉體を離れ、『虛無の身、無極の體』と成ることが出來る上は、全く五妙快樂の體であるから、十方淨土を自由に遊戯して、諸佛を供養し、阿彌陀佛よりは、直々の御說法を聽聞し、三明六通、自由自在の身柄、頓て根本の無明を斷じ、等覺補處の大薩埵より、妙覺果滿の位にも昇ることが出來る譯である。されば吾々が、全くの眞實智慧を、圓滿に得やうといふには、此の境界を望まねば成らぬのである。

(五) そこで此境界に成り得たるときが、即ち理智冥合と申して、宇宙の道理と、自己の心と、全く一致して了ふた時である。之を佛の四智といふ。四智とは、大圓鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智

自受用他受用具足して卽報身佛

のこと。成所作智とは、眼耳鼻舌身の前五識が、全く道理と一致した有樣である。それから妙觀察智とは、意識の惡習慣が、殘らず取り除けて、道理と一致したのである。それから平等性智とは、その意識の奧にある所の末那識の穢が除けて、淸淨に成つた有樣である。それから大圓鏡智とは、末那識の又その奧の、藏識といふものが、全く潔いに拭へて、能く道理と一致したる有樣である。されば四智とは、心の全部を、能く道理と一致せしめたる有樣にて、之を理智冥合と名ける。此の理智冥合の處、之を佛の自受用身と名けるのである。

(六) さればその自受用とは、自己の心と道理との關係で在つて、未

だ他に接して利益を與へる働きをば、爲すことが出來ぬのである。去りながら、内に既に此の理智冥合の德を具へて、それで他の衆生の迷ひを見て、その儘に捨てゝ置けるものでない。それが『何故捨て置けぬか』といふに、眞實智慧が、そのまゝ慈悲心であるのだから、その理智冥合の結果は、必ず他に向つて慈悲と成る。此のとき他に對して說法する姿、之を佛の他受用身と名けるのである。之を又悲智雙行と名くるのである。されど此の他受用の姿は、善因善果の極に達したる有樣であるのだから、同じ菩薩の中に在つても、三賢以下の菩薩にては、拜することの出來ぬ御姿にて、全く初地以上の菩薩の爲めに、御說法を爲さるゝ御姿である。今西方淨土に、在しま

化身は佛の大悲

して說法し給ふ所の御佛は、即ち此の他受用の御姿である。故に他受用と、自受用との區別はあるも、之を報身の如來と名ける。報身とは、善因善果の極に達したる御果報といふことである。故に此の如來の淨土を、又報土と名けるのである。されば報身報土とは、理智冥合して、悲智能く雙べ行はれる所の境界である。

(七) それから尙その慈悲を、一層發展させて、三賢以下の菩薩より、その他の迷ひの衆生に至るまで、之を濟度しやうといふとさに、本の報身の儘では、三賢以下の者の心に應ずることが出來ぬ。此に於て、それ相當の身を現ずるのである。是はその實は、佛の方から區別を立てゝ行くのではない、一の姿を衆生の心で、その自分の程度

だけに拜むのである。之を化身佛と名ける。勿論、衆生の心に應ずるといふ所より、應身佛ともいふ。その應身の中に、勝應身、劣應身の區別がある。是は三賢以上と、十信以下との區別である。是れも矢張、衆生の心の程度に依つて、十信以下の者の拜む御姿は、劣つて居るから、劣應身といひ。三賢以上の者の拜む御姿は、稍〻勝れて居るから、勝應身と名けられるのである。されば佛の大悲は、全く此の化身佛に於て、顯はるゝのである。

信仰の所對として一等確實なるは報身佛

(八) 然るに吾々の程度に在つて、信仰の對象としては、如何なる佛體が適當するであらうかといふたら、言ふまでもない。化身佛でなければ拜むことの出來ない身分である。されば化身佛を以て、信仰

の對象と、定めやうとするときに、その化身佛は、本の報身佛より現出したるものにて、その人の程度に依つて一樣でない。既に一樣でないとすると、その信仰の上に、動搖が起る。故にその對象としては、その本元たる報身佛を、所對として之を信じ、而して之に應ずるだけの御姿を、拜するといふのが、穩當なる信仰であらうともふ。何故といふに、信仰といふことは、自己の心の監督を仕て戴く方の、方向を決めるのであるから、法身佛の如きは、理體であるから餘りに漠として、捕まらないで困る。さりとて化身體では、各自の程度に依つて、定りが着かぬ。故に悲智雙行の報身佛を以て、信仰の對象とすることは、吾々の心を確定する上に於て、最も便利

信仰の對象を定む

である。而して善因善果の極に達したる御姿であるから、吾々が實行上の標準として、之に增したるものはない。されば吾々が信仰の對象としては、報身報土の阿彌陀如來と定むるのである。

八、修養法

(一) 上來既に信仰の對象を定めて見れば、次に起る必要は修養法である。若し此の修養法といふ事が無かつたなら、恰も矢場に的を懸けて、弓を引かぬと同じやうなものである。又弓を引かぬ者には、的の必要もないやうなものである。されば吾々が、信仰の對象としては、未だ惡因惡果の分子を除かずして、善因善果の極に達し得ざ

るものは、本尊として崇拜するに足らぬのである。去りとて抽象的の道理も、吾々具體的の人間としては、情の上に於て、所對とすることが出來ぬのである。それのみならず、その道理の中には、善惡二性を含めて、如何やうにも相應するのであるから、假令之を經典に寫して、崇めて見た所で、その威嚴を認めることが出來ぬ。此に於て、その善性の部分を應用して、善因善果の極に、達したる報身佛に過ぎたるものはない。その報身佛の中に於ても、それ〳〵の本願が在つて、佛果を得たるものであるから、その果上の御利益も、自然に異なる譯である。然るに極樂淨土の阿彌陀佛の如きは、因位法藏のその時より、別段に末世下根の吾々衆生の爲めに、御心配下

修養法として念佛を撰ぶ所以を示す

され、念佛往生、易修易行の法を以て、最第一の本願と爲され、その本願を成就させる爲めに、無央數劫の間、功を積み德を累ねて、遂にその願を成就して、淨土を構へ、佛に成られたといふことは、既に無量壽經等に說かれたる通りである。されば吾々衆生に、最も因緣ふかくして、又吾々衆生の爲めにも、信仰の對象として求め易く、而も易修易行の念佛を標章として、御救ひ下さる御本願と聞ては、吾々衆生の信仰の對象としては、此の極樂淨土の阿彌陀佛に、過ぎたるものはないに決つてゐる。

(二) 然るに阿彌陀佛が、吾々衆生の爲めに、その修養法として口稱の念佛を、本願と爲されたといふことが、唯易修易行といふに止まつたのでは、餘りに價値のない事に思はれる。その他に別段、優れたことはないかといふに、念佛は阿彌陀佛が、既に此の行を本願として、その本願を成就させる爲めに、無央數劫の積功累德を、爲されたるに依つて、その結果として、あらゆる功德が、此の念佛の中に具へて居るといふのは、經典の中に唱道されて居る。それ故に、念佛には易の義と、勝の義を具備して居る。是れ他の諸行に勝るゝ所以であるといふてある。けれども亦何れの如來も、本願を立て、因位の修行を爲されたのであるから、此に至つては、何れの行も同等の樣にも想はれる。されば此の他に、何等か今少し、念佛の諸行に優るゝ所以を、發見したき心地がする。

（三）此に於て熟々考ふるに、元來報身佛は、善因善果の極に、達したる果名であるのだから、如何なる行でも、善でさへあれば、みな相應せねば成らぬ道理である。然るものを、單に口稱の一行を、撰取なされたといふことが、何の邊にあるだらうかといふに、成るほど諸善圓備して佛果に至るのであるから、何の善でも、佛果の糧に成らぬものはない。それであるから、聖光上人は、『諸善みな念佛である』といはれ居る。成るほどそれに相違ない。佛とは、善因善果の極、念とは、不忘の義であるから、始終、善を心懸げて、忘れぬといふことに成る。されば諸行みな念佛といふて差支ない。けれども諸善萬行といふものは、一時に行ふことの出來べきものでない。

故に善導和尚も『行を學ばむと欲せば、有緣の法に依れ』と仰せられてある。さればその諸善萬行の中に於ても、最も自己に有緣にして、適切なるものを撰みて、之を魁として、諸善萬行を率ひさせる工夫をせねば成らぬ。是れ別に一行を、撰ばねば成らぬ所以である。

（四）然るに念佛は、彌陀の本願である。若し彌陀を信仰の對象とする者の爲めには、此の上もない有緣の法である。而も口稱の念佛であるから、修し易いといふことも事實である。而もその修し易い念佛が、能く諸善の先導と成つて、萬行を率ひるだけの力を、有して居るか何うかといふことは、大切な問題である。如何に念佛が、修

し易いからといふたとて、孤立の念佛で在つて、到底、諸善の先導と成る力がないものとした日には、阿彌陀佛の本願も、格別に功能のないものといはねば成らぬ、流石に阿彌陀佛が、本願となされたほどの念佛である。必ず善因善果の極に、導かんとする念佛であるのだから、此の念佛を相續すると同時に、他の諸善も自然に進むやうに、成らねばならぬ道理である。然るに若しも、念佛は信じて稱ふるが、その念佛は孤立にして、少しも自己の貪瞋煩惱を、省る心も起きず、又他の善事に對して、嫉妬は起るが、隨喜の心は起きぬといふ樣なことで在つたなら、正さ本願の念佛に、相當して居らぬのである。されば阿彌陀如來、本願の念佛を心掛ける人は、先づ

自己の心を、反省して見るといふことが、第一の要愼である。

(五) 然してその自己反省といふことは、彌陀の本願に、適ふ所の第一條件である。それは何故といふに、彌陀の本願は、偏に末世吾々如き、煩惱具足の凡夫を、救はんが爲めの御心配である。若し吾々の意に、煩惱なきものと認めるときには、阿彌陀如來を賴む必要がなく成る。全く自己の思想の拙さを認めて、始て斯る者の爲に、佛は御心配を下されたのであらう。『此の御親切を無にしては濟まぬ』と言ふ所より、口稱の念佛に依つて、御縋りをするのである。是が全く本願に適ふ所の念佛である。此の本願に適ふ念佛を、常に油斷なく心懸けて相續すれば、常に貪瞋煩惱を恣にする憂がなく、既

に貪瞋煩惱を恣にさへせねば、自然に自己の佛性より起り來る淸動、即ち親切といふものが、自己心内の主人公と成ることが出來る。此に於て、眼耳手足も、みなその親切の指揮の下に、活動を始めるから、その身分だけ、器量だけの善事は、少しづゝでも行ふことの出來るやうに成る。此に至つて始めて、念佛が諸善を率ひたといふものである。

（六）されどお互に、佛果に至るまでは、決して油斷の出來べきものでない。況して此娑婆三界は、魔緣の多い所である。自心親ら可いと思ふて慚愧心を失ふたら、忽ち無慚無愧といふ惡魔が附込む、油斷は成らぬ。しかれば、彌陀本願の念佛とは何である、南無阿彌陀

佛と御願みをする言辭である。また阿彌陀佛とは、『親切の親玉よ』と呼ばふ言辭である。人間の行爲を言はゞ、身口意の三業一致といふことが、何より大切の修養である。然るに修養法としては、何れを先にするが行ひ易いかといふに、意は『野馬猿猴の如し』といふて、何分に捕捉し難いものである。又身業の方は、渾て形式であるから、時と場合とに依つて、行ふことの出來ぬことがある。之に反して、口業の方は、何時でも行ふことが出來る。若し高聲で差支へるといふならば、我耳に達するだけで差支がない。而も總ての命令は、聲に依つて行はれるものである。故に口業は、身業を制し、意業を率ひる力を有つて居る。されば三業一致の修養を爲す上にも、

口稱の念佛は、最も效能のあるものである。是れ阿彌陀佛が、吾々如き煩惱具足の凡夫を、『何卒容易く救ひたい』といふ大慈大悲の御心より、御工夫くだされて、御本願と成されたる念佛である。之を想ふに就ても、お互凡夫の修養には、此の修し易き口稱の念佛を以て、往生の道を定むるときに、現世後生ともに、終始一貫の大安樂を得べきに相違ない。

六

附錄 信仰の對象 終

大正六年十二月二十日印刷
大正六年十二月廿六日發行（定價金壹圓）

東京市小石川區表町五十番地
編輯兼發行者 村上運梢

東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷者 島連太郎

東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷所 三秀舍

不許複製

發行所 東京小石川區表町五十番地 三學社
振替東京一三一三八番

325
262

終